

2003年12月24日

干支で考える2003年

日商岩井総合研究所

2003年の干支は「癸未（みずのと・ひつじ）」である。

十干の「癸（みずのと）」は、五行である「木・火・土・金・水」のうち最後である「水の弟」。十干の10番目に位置し、四季では冬、方位では北を指す。来年は最初の年である甲（きのえ）に戻る。2003年も、この年から何かが始まるというよりは、「十年一昔」がちようど一巡し、「終わりの終わり」に位置する年と考えた方がよさそうだ。

「癸」に手偏をつけると「揆」となり、「法（のり）」や「司（つかさ）」を意味する。これが一度にひっくり返るのが「一揆」というわけ。2003年は既存の秩序が守られるか、それともひっくり返るのか。いろんな意味で、リーダーシップに注目が集まる年になるだろう。先の癸の年であった1993年といえば、細川政権が誕生して自民党が政権から下野した年。それから10年、さまざまな紆余曲折があったものの、いよいよ「自民党をぶっ壊す」ことになるのかどうか。

十二支の「未（ひつじ）」は、方位では南西、時刻では午後2時を指す。意味は「いまだし」。漢文の中にこの文字が現れると、「いまだ～せず」と読み返して否定形となるのがご存知の通り。2003年も「未熟」で「未練」の多い年かもしれないが、見方を変えれば「未来」を切り開く「未曾有」の年ともなりうる。

過去の未年を振り返ってみると、ひとつの時代の終わりであることが多い。1991年にはソ連邦が崩壊し、名実ともに冷戦が終わった。国内においては、この夏の株価下落がバブル時代の終焉を告げた。1979年には中国で改革開放政策が始まり、英国ではサッチャー政権が誕生した。洋の東西で、国家主導型の経済体制が終焉したわけである。1967年は第3次中東戦争によって従来の軍事バランスが崩壊し、日本では資本取引の自由化がスタートした。1955年は西ドイツの占領状態が終わり、日本では保守大合同による「55年体制」が始まった。

60年前の「癸未」は1943年（昭和18年）である。この年、スターリングラード攻防戦でドイツ軍が敗退し、イタリアは無条件降伏する。日本軍はガダルカナル島から撤退し、海軍の名将、山本五十六長官が戦死した。戦局われに利あらず、国内の生活は戦時色が強まり、あまりいいことがなかった年のようである。

兜町の相場格言では、「午（うま）尻下がり、未（ひつじ）辛抱」という。午年の2002年が本当に尻下がりになってしまったので、来年はじっと我慢の覚悟も必要かもしれない。という、まるで「大凶」のおみくじのようで恐縮だが、2003年は良くも悪くも過去に区切りをつけ、新しい体制への扉が見えてくる年としたいものである。（吉崎達彦）